審査の結果の要旨

氏名　杉浦義典

“心配”という心的現象は、「問題を心理的に解決しようとする」積極的なストレス対処という能動的な側面を持ちつつも、結果的には「制御困難な心的状態に陥り、不快な思考に転じてしまう」という受動性を示す。本論文は、“心配”がこのような相反する性質を併せ持つことに注目し、容易に不適応現象に変容してしまう“心配”独特のメカニズムを実証的に明らかにすることを目的としたものである。

まず第１章で先行研究を幅広く展望し、その問題点や課題を明確にし、第２章で研究の目的と実証的な研究方法を提示している。次に第３章（研究１）では、「問題解決の動機（問題解決志向性）」と「制御困難性」が無相関であるとの先行研究に対して、「問題が解決されていないという認知的評価（未解決感）」を媒介変数として導入することで、単純相関では見えてこなかった、問題解決志向性から制御困難性への影響といった新たな関係性を見出している。ここで、本研究の基本モデルが提示された。

第４章（研究２）では、「問題解決志向性」と「制御困難性」の関係をさらに詳しく分析するためにストレス対処研究を参照として、「問題解決の方略（問題焦点型対処方略）」と「思考の制御困難性」の関連性を検討し、「問題焦点型対処方略」の種類を問わず、両者の間に正の関連性があることを見出した。ここで、どのような方略を採用するかではなく、どのように方略を用いるかが重要であることが明らかとなった。具体的には、方略を用いるときに考え続けてしまう（「思考の持続」）ことで、「思考の制御困難性」が生じることを明らかにした。そこで、第５章（研究３）では、研究１の成果に研究２の結果を統合するものとして、「問題焦点型対処方略」に「考え続ける義務感」と「未解決感」といった「思考を持続させる認知」が媒介変数として介在することで、「制御困難性」が生じるという“心配”独特のメカニズムを実証的に示した。最後に第６章で、研究の結論として、「問題解決志向性」が動機となりながらも、最終的には「制御困難性」を示す“心配”が生じるメカニズムをモデルとして提案している。

本論文は、複数の先行研究間で認められた結果の相違を、媒介変数を導入することで解決し、全体として先行研究の成果を整合的に統合するものとなっており、“心配”に関する研究を新たな段階に進めた点で特に意義がある。また、共分散構造分析などの最新の統計的手法も取り入れて手堅くデータ処理を進めており、心理学研究法の観点からも評価できる。さらに、研究１から３に至る過程は、研究の結果を段階的に発展させており、適切な論理の進め方をしていると判断される。

“心配”の概念は、健康と不健康の両領域にまたがる重要な概念である。本研究で示されたモデルは、“心配”の制御困難性を減じ、より能動性の強い適応的で健康な状態に移行させる臨床的介入を行ううえでも貴重な示唆を与えるものである。したがって、本論文は、心理学的にも臨床的にも興味深い“心配”という心的現象のメカニズムを、的確な実証的方法論に基づいて明らかにした研究であり、優れた論文として評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。